変はその攪乱要因として偶発的に起きたという主張を読み取るべきなのだろうか。

そうだとするならば，本書の分析はこの説を論証したとするには不十分である。問題を言いかえるとこうなる。重光の対中国「宥和」政策は，果たして日本の外交政策をどれだけ規定する影響力をもつものだったのか。これに対する解答は，二つの方向からなされる必要がある。一つは，対中国「宥和」政策が満蒙権益を超越できるだけの説得力をもって受容される基盤が，当時の日本にあったかどうかの検討である。日露戦争以来，満蒙権益はさまざまな（拡大）解釈をほどこされ，あらゆる機会を利用して日本の国益に死活のものとして，イデオロギーともいえる強固さをもって国民に浸透するに至った。著者のいうように重光による国民政府との交渉が霞ヶ関外交としてしか成功しえないものなら，対中国「宥和」政策は日本の対外政策を転換させるだけの原動力をもちえなかったと評価することもできる。

いま一つの方向は，軍部とくに陸軍の満蒙権益への固執を抑制し，政治的に誘導できる見通しがあったかどうかという検討である。そもそも軍部は対外政策を規定できる一定の政治力をもっているのだから，軍部の問題を抜きに「特異点」として評価してしまうのは問題である。また先に引用したように，著者は「経済規定論で矛盾の蓄積過程としてのみ満州事変を理解」する研究を批判しているが，そうしたまとめ方には多少の異論がある。なぜなら，70年代以降の研究においては，「経済規定論」としてよりも，現地解決方式や武力行使が容認されていく過程の分析を通じて，矛盾の蓄積過程として満州事変が理解されてきたからである。また，外交交渉の問題だけでなく，軍部の動向や軍部と内閣・外務省との関係などが精力的に解明されてきたはずである。伊香俊哉『近代日本と戦争違法化体制——第一次世界大戦から日中戦争へ——』（吉川弘文館，2002年）が詳細に明らかにしたように，武力行使を容認する姿勢が20年代から一貫してあった以上，満州事変を偶発的なものとして扱うことには大きな疑問を感じる。

満州事変によって「以前の状況がすべて再構築不可能なものとなったのではない，ということを明らかにする」という著者の提起は重要である。どのような状況や関係が，再構築可能あるいは不可能となったのかを腑分けしてみることも大切だと考える。しかし，満州事変が大日本帝国の政治構造の矛盾の蓄積過程として引き起こされていく側面を消去することは首肯しがたい。ここでは，必然か偶然かという二者択一的な議論をしているわけではない。満州事変を「特異点」としてとらえることによって，それまでの歴史過程から満州事変がはじきだされ説明不要化されることを危惧しているのである。そうした見方は，著者が序章で述べている「社会史，地域史研究（世界システム論・ネットワーク論）同様，歴史学の全体性回復を再構築する」という目的に合致しないのではないだろうか。

いくつかの問題点を述べてみたが，緻密な実証分析に対して，批評が外在的なものになったのではないかと懸念している。また評者の力量不足のために政策論的な方法の是非については言及できなかった。ご海容願いたい。

（吉川弘文館，2003年12月刊，A 5 判，295頁，10000円）

書　評

シンジルト『民族の語りの文法
——中国青海省モンゴル族の日常・紛争・教育——』

渡　邊　日　日

I

書評にあたっては，はじめに評者と書物との距離を明確にしておくことが，著者にも読者にもフェアな態度であろう。

評者は社会人類学・シベリア民族誌・ロシア社会学を専門としており，近年，シベリア南部に居住するブリヤート人を一例として，ポストソ連期の社会変動の研究に携わっている者である。「同じモンゴル系」を対象とする点で，また，本書で展開する著者の理論的テーマに深く関心を持ち，「民族に関する／の語り」の論点を評者なりに民族誌記述に取り

込んでいる点で（「民族の解釈学へのプロレゴメナ：セレンガ・ブリヤート，1996」井上紘一編『民族の共存を求めて』第2巻，北海道大学スラブ研究センター，1997年），著者とは近い立場にいる。他方で，中国の民族誌研究の現状や民族（政策）史には疎い。この書評で，叙述や議論の偏向性およびあり得る誤記・誤読はそれゆえ評者に帰せられるべきものであること，また，地域研究上の細部へというよりは論理展開の可能性に着目することをあらかじめ断っておきたい。また，後に添付された正誤表付きを土台にしたこと，尾崎孝宏氏による精巧な書評（『文化人類学』第69巻，2004年）がすでに存在することを附記しておく。

II

本書は，中国青海省河南モンゴル族自治県と関連地域のモンゴル人を対象とした民族誌であり，モンゴル人とは誰かと問題を立てるところから始まる。民族は語られるものであると見る著者は，その語り方は恣意的ではなく体系性（「文法」）を持つゆえに，民族は「それを語る者にとってリアルである」（1頁）と主張する。

第一章「理論研究における民族の語り」では，昨今の民族論が俯瞰され，中国の政治史と学説史における民族論が，この分野で大きな影響力を持った費孝通の議論を中心に素描される。その民族論は，人々の民族の語り方を方向づける点で「権威的語り」を準備するものであった。著者はこれに住民（特に「少数民族」）が織りなす「自家製語り」を反措定し，人類学的民族研究の直接的な対象とする。

第二章「モンゴルイメージと河南蒙旗モンゴル社会」は，調査地域の史的変遷や概略が描かれる箇所である。この地域のモンゴル人は，言語や文化の面で「チベット化」する歴史を経験した。「チベット化」というのは外部からの評価であるが，当事者にとっては，生活は「ソッゴ（モンゴル的なるもの・モンゴル人）」であり続けている，という。ここで，ソッゴ／チベット／河南蒙旗の人々という言葉それぞれが具体的に誰を指すかという問いが生じるが，その指示内容は，「語りの文法」の中で，語られる状況に応じて変化する。

第三章「日常生活における民族の語り」では，まず，河南蒙旗の人々を指示する術語の交通整理が行われる。著者は，河南蒙旗近隣のチベット系住民による他称としてのソッゴを「ソッゴT」とし，河南蒙旗の自称を「ソッゴH」，中国の民族政策の中で規定されたレベルを「ソッゴC」，他地域のモンゴル人を指す時のソッゴを「ソッゴM」と腑分けする。河南蒙旗と近隣地域との間には，外面的には文化的差異は存在しない。だが，河南蒙旗の人々は自称としても他称としても「ソッゴ」名を受け入れ，たとえばゲル（天幕）の特徴に，「我々ソッゴ的なるもの」即ち「ソッゴH的なもの」を結び付けていく。とはいえ，河南蒙旗のソッゴ（チベット語を普通用いる）は，モンゴル語を話すモンゴル人といった「ソッゴM」を意識するとき，「ソッゴH」にある空白を感じざるを得ない。それゆえ民族名の語りは文脈依存的にならざるを得ないが，著者はそのパターンを析出していく。

第四章「牧地紛争における民族の語り」は，河南蒙旗地域の境界上で生じた牧地の使用権に関する紛争や衝突，およびそれと関連する民族の語りを叙述する。この紛争は民族紛争ではないが，それを解釈し，行政に働きかけようとするとき，民族が言及され，また民族帰属が重視される。先住の特権や民族平等の原則にアピールするため，当事者は「モンゴル族（ソッゴC）」であることを強調する。だが注意すべきなのは，そこでソッゴCとされる人々とは，紛争をきっかけに自らモンゴル人であることを認識するソッゴHのことであり，また逆に，紛争こそ「チベット化」に抗してソッゴHであろうとする強い触媒だ，という点である。

第五章「教育運動における民族の語り」では，モンゴル語教育の導入と放棄，このことの語りへの余波について述べられる。チベット語を第一言語とする河南蒙旗の人々にとって，既述したごとく，モンゴル語能力と自分の民族意識とを繋ぎ合わせることは困難な作業である。モンゴル教育運動は，それゆえ，彼ら彼女らに民族意識のあり方に強い影響を及ぼすこととなった。県エリートがソッゴCを念頭にモンゴル語教育を企図したが，チベット語環境にソッゴHは存在するため，また教科書不足など

ハードな原因も手伝って，モンゴル語は教授言語から教科言語へと転換を余儀なくされた。と同時に，ソッゴMへの視線を自らに感じつつも，河南蒙旗の人々は，何をもってモンゴル的と捉えるかと民族認識の再考を迫られたのであった。

結論「民族の語りの文法」で著者は，これまでの章の議論を振り返りつつ，民族をめぐる語りに規則性・規約性という「文法」が存在し，この「文法」の存在こそが民族であることのリアリティを保証している，と主張し，「自家製語り」のメカニズムを解明することが研究者の仕事である，と本書を締め括っている。

Ⅲ

本書は高精度な理論的戦略に基づいて計画されている。民族に関する昨今の議論では，民族は一定の歴史的・構造的状況の中で発明され，構成された人工物であって，強固な集団の存在を喚起させるがごとき実体ではない，という見解が主流である。いわゆる，原初主義と構築主義とが対立させられ，民族的単位の歴史的な連続性を補説する議論（スミス）があるとはいえ，後者が席巻したかのように見える。しかし，人工的で創造されたものがなぜ当事者にとってはリアルに映るのか，という問いは残されたままである。アンダーソンの「想像の共同体」論は，想像物でしかないネーションがリアルなものとして出現する技術（印刷技術の普及や小説の読書，国勢調査など）を描いたが，構築主義の一翼として受け止められてきており，ミッシングリンクがあったと民族論を振り返らざるを得ない。著者は，実体論的な民族観を批判しつつも，民族のリアリティを成立させるメカニズムを解明しようとする。研究者が民族は虚構であると言い，当事者はそうは考えていないとすれば，このギャップは，権威的な主張／日常的な態度というような対立を反復することにしかならない。これで研究がリアリティを把握することができるのだろうかと著者は疑念しているのだが，こうした著者の態度は，研究活動自体への内省を伴った理論化を試みる本書の議論展開に滲み出ており，評者は深く共感するものである。

著者の戦略は従来のモンゴル研究にも向けられている。「本物のモンゴル人」観に批判を加えつつ，同時にモンゴル人の多様性といった立論に対しても，多様性を口にする立場の者の単一性志向を抉りだして異議を唱える際の筆のタッチ（第二章）は，爽快ですらある。多様性という術語が暗に内在させている本物性の措定を批判するためにも，著者は人々の「自家製語り」にある「文法」を解析しなければならなかった。なぜならば，「文法」が存在しなければ，河南蒙旗の人々による「自家製語り」は，強固な中心の本物性（主題）から相対化されるだけのバリエーション（変奏）に過ぎなくなるからである。自分がどの立場から何・誰をどの次元で記述し，議論しようとしているのかという，考えてみれば研究にとって不可欠な最初の内省をも理論水準で引き受け，民族論・民族誌・モンゴル研究といったさまざまな領域に対して重層的に返答しようとした著者の手腕は大いに高く評価されて良い。評者が本書を，人類学者やモンゴル・中国研究者だけでなく，歴史学者や地域研究者に広く推薦したい大きな理由の一つがこれである。

本書の根幹をなす三・四・五章の繋がり，つまり日常生活・紛争・教育というテーマの設定もまた，有機的である。日常風景の中での民族の語られ方だけを見るのであれば，まさに民族が語られる場が観察されているのであるから，語りによる民族のリアリティが出現するのは当然であるし，もしそこでのみ議論を立てるのであれば循環論法にすらなってしまう。ある種の言説分析が陥る危険性がここにある。しかし著者は，民族（集団）が，周囲の他者（チベット人）に対して自己を見る契機（「カテゴリーの領有」と著者は言う）と，「真のソッゴ」に対して自己を見る契機（「カテゴリーの譲渡」）という叙述と検討の対象をきちんと設定しているのであって，前者が牧地紛争，後者が学校教育に顕著に見られるわけである。つまり，民族は「語られるもの」ではあるが，民族が実際に語られる対象として浮上する社会的事件や制度の分析があってはじめて，そうした民族観が十全に主張され得る。

理論構想の広さゆえ，読者に多くの思考を促す本書ではあるが，それゆえと言うべきか，幾つか不明な点や疑問が残る。順不同に摘記してみる。

①先述のように著者は第三章で，ソッゴの民族アイデンティティの多層性を描写するにあたり，ソッゴT・H・C・Mといった術語をあらかじめ導入していた。この語法は読みにくいとやはり言わざるを得ない。住民という当事者がそのように分けて毎日を送っているのか，それとも著者がそう観察している（だけ）なのか，時にどちらなのか分からなくなる箇所がある。

②この疑問は，民族アイデンティティの位相にも関わる。先のカテゴリーの話のところで著者は，「対周囲のチベットという『他者』との関係における他者の他者化，裏返せば自己の自己化と，対『真の』ソッゴ（M）との関係における自己の他者化というパターン」（161頁）が存在する，と述べる。この指摘は正しい。だが，十分にそう指摘するには，住民にとって民族アイデンティティがどこまで重要なのかを述べる必要があった。即ち，ジェンダーや都市／農村などさまざまなアイデンティティの切り取られ方がある中で，民族アイデンティティが占める独特の位相が析出されてしかるべきだったのではないか（自己［ないしは他者］とは多様な顔を持つ存在である）。もちろん，著者はこの質問に答えるべく，第四・五章をすでに呈示していたわけだが，「人はいつも民族のことを語っているのか」という疑問は消えない。

③第一章では，バルト・ギアツ・ホブズボウム・アンダーソン・スミスといった民族論の系譜がサーベイされている。私見では，著者は民族論の流れを一般的に纏めるのではなく，バルトの「エスニック・バウンダリー」論（F. Barth, ed., *Ethnic Groups and Boundaries*, Oslo, 1969)と全面的に格闘すべきであった。バルトについて著者は「境界やその境界を維持するアイデンティティのメカニズムに関する言及が欠如していた」（24頁）と述べるに止まっているが，「エスニック・カテゴリー」という術語自体バルトのそれであり，また，本書を通じて展開されている民族弁別の複雑さとそれを支える相互作用のパターンなどもバルトの問題構成と大きく重なっている。一方で，著者の場合，語りを重視する点で，自然主義的に民族的相互作用が描写できるとするバルトとずれる。バルトの議論との類似性と差異を明示することも，理論的課題の一つとして欲しかったと思う。

④同じく第一章で著者は，「権威的語り」と「自家製語り」とを対置させていた。この点については結論部でも振り返られ，後者における民族の「強制的な想像力」（308頁）が指摘されるのではあるが，いかにこの二者の語りが実際に対置されているのかは述べられないままである。政策や研究の次元で言われる民族と，「文法」を兼ね備えた形で語られる民族との間にどのような齟齬が具体的にあるのか，ないのか，よく分からない。たとえば学校教育は，政策立案者サイドで定義され，運用される民族概念と，住民自身が普段の生活の中で持ち，それでもって語りが生まれるような民族概念とがぶつかる場とも想定できる。調査地の生活当事者の現場そのもので接近し，時には衝突するかも知れない「権威的語り」と「自家製語り」との関係の解明は，本来著者が自身の検討課題と認めたものではなかったか。

⑤第一章で著者は，中国の民族政策の要となった費考通の議論に，費自身そう述べていることもあって，ロシア人人類学者シロコゴロフの影響を認めている。常に変化するものとして民族(エトノス)を捉えているとシロコゴロフを理解するのは間違いないが（ただ，ロシア語以外でもS. M. Shirokogoroff, *Psychomental Complex of the Tungus*, London, 1935といった英文の著作も多いので，著者は原典を参照してしかるべきだったのではないかとも思う），問題は，その形態と存在が一定しない民族という単位が，いかに政策の中で固定的なものとされていくのか，である。常に変化しているのが民族であれば，そもそも，民族識別政策という一次的にせよ民族を固定化する方策自体，原理的には実行不可能であろう。もっともこの問題は，評者を含めロシア研究者にとっても難関であり，まだ解明されていないことも認めなければならない。

疑問が残るとはいえ，本書は，民族について思考する者にとって重要な一つの羅針盤としてあり続けるだろう。評者は書評の一般的「書式」に従ってかく述べているのではない。民族を内在的に把握しようとする者は，本書に接することで，それまでの自分の議論を真摯に再考せざるを得なくなる。こう言

う評者もその一人である。
（風響社，2003年9月刊，A5判，356頁，4000円）

書　評

若尾祐司・羽賀祥二編『記録と記憶の比較文化史——史誌・記念碑・郷土』

小　関　　隆

本書は，「それぞれの国民史に依拠しながら」「国民史の枠を超えて国際比較のレベルで」「近代化に伴う歴史意識の覚醒，歴史詮索と記録・記憶行動の態様」を検討せんとする論集であり，その淵源は執筆者のうち5人が参加した科研費共同研究にある。まず第1章以下の各論考を概観し，その後に共同研究としての本書の意義を検討したい。

第1章「近代ドイツの地域文化と歴史協会」（若尾祐司）は，小公国ナッサウの歴史協会が「地域を越える歴史意識の確保」にどう関与したかを跡づける。1812年の設立当初から，歴史協会では歴史と文化の学習を通じて「ナッサウ・アイデンティティ」を確保することが目指されたが，ナッサウこそドイツ人発祥の地であるという「国民的な過去意識」ゆえ，歴史協会の活動は地域史と国民史とを結びつけ，ナッサウをこえる国民的なアイデンティティの形成を促して，「歴史・古学研究の国民化」をリードすることとなった。

第2章「記録化の意図と方法」（羽賀祥二）では，19世紀前半の地誌に見られる民俗記述が検討される。「古さ」を基準とし，復古的な習俗を理想視する地誌における民俗記述には，「古俗への回帰による風俗秩序の回復」という統治にかかわる狙いが込められていた。急激な社会変動への抑止機能が地誌に期待されたわけだが，同時に，地誌づくりは民俗学の形成を導く意味をももった。

第3章「近世日本の地誌と地域像」（溝口常俊）もまた地誌を素材に人々の郷土観に迫ろうとする論考であり，「実世界」「想像的世界」「抽象的世界」という地理学の分析視角を導入する。

アメリカ南部の記念碑に着目し，建国のプロセスをめぐる記憶が後の時代においていかなる機能を果たすのかを明らかにすることが，第4章「記念碑の創るアメリカ」（和田光弘）の課題である。とりわけ注目されるのが「史蹟や記念碑に投影された集団記憶が創り出す社会的構築物」としての独立戦争であり，さまざまな立場の者たちがそれぞれに独立革命を利用してきた。マイノリティに「社会の主流へのアクセス」を確保する手がかりを与え，南北戦争による分裂の傷を癒す機能を担う独立革命の本質は，「アメリカ国民を創り上げる国民統合の装置」であることに他ならない。

第5章「セイラムにおける魔女狩りの記憶」（久田由佳子）は，1692年の魔女狩り，魔女裁判の記念行事を素材に，「当地の人々にとって好ましからざる過去を顕彰する」ことの意味を考察する。19世紀後半からビジネスや観光の資源として「魔女の街」なるイメージを活用してきたセイラム（裁判，処刑の地）と，「負の記憶」との対峙がより切実な課題となったダンヴァース（事件発生の地）とでは，事件へのスタンスは対照的だったが，それでも，魔女裁判300周年を記念するにあたり，「事件を人権問題と絡め，歴史の教訓として捉えるという姿勢においては，両者は共通していた」。

第6章「近代イギリスにおける戦争の記念・顕彰行為」（小島崇）では，対仏戦争から第一次大戦までの戦争記念碑の検討を通じて，戦争および「戦争英雄」の「国民化」「民主化」（一般戦士をも「戦争英雄」と見なし，記念・顕彰する記念碑が登場する）が確認されるとともに，記念碑をめぐる「読み」の相克が明らかにされる。遺族の抱く私的記憶が記念・顕彰行為を通じて公的記憶に接合され，「市民的矜持」や「郷土の誇り」へと回収されがちであった一方，生ける「無名戦士」たる退役軍人の犠牲への注目を求める主張は，公的記憶とは異なる「読み」を記念碑や記念式典に施そうとするものだった。

第7章「二〇世紀中国の記念碑文化」（王暁葵）は，広州の2つの記念碑，中華民国時代の「黄花崗公園」と中華人民共和国時代の「広州起義烈士陵園」をとりあげ，「革命歴史」が「神話化」「資源化」されてゆく過程を明らかにする。同時に，かつ

2006年3月15日発行(毎月1回15日発行)：1954年3月8日第三種郵便物認可　ISSN 0386-9237

REKISHIGAKU KENKYU

(JOURNAL OF HISTORICAL STUDIES)

No. 812　March 2006

Articles
Interest Limitation Laws and the Statute of Limitations on Loan Contracts in the Middle Ages in Japan ……IHARA Kesao (1)
The Development in NISHIMURA Shigeki's "Theory of Japanese Morality"……MANABE Masayuki (18)
Trends
Review of Studies about the Monetary System in Medieval-Early Modern Transition of Japan ……KAWATO Takashi (36)
Book Reviews (Unless otherwise noted, works are written in Japanese)
MAKIHARA Shigeyuki, *The Land System and Local Society in Early Modern Japan* ……INABA Tsuguharu (44)
AOI Akihito, *Colonial Shintō Shrines and Japan's Empire* ……AONO Masaaki (47)
KOIKE Seiichi, *The Manchurian Incident and Japan's Policy toward China*……KOBAYASHI Hiroharu (50)
SHINJILT, *The Grammatics of the Recounting of Ethnicity* ……WATANABE Hibi (53)
WAKAO Yūji & HAGA Shōji (eds.), *Comparative Cultural History of Record and Memory* ……KOSEKI Takashi (57)
Recent Publications …… (60)

Edited by
REKISHIGAKU KENKYUKAI
(The Historical Science Society of Japan, Founded in 1932)
Office : Seika Bldg., 2, Kanda Jinbō-chō 2 chōme, Chiyoda-ku, Tokyo, 101-0051 Japan
Rekishigaku kenkyu is published monthly by Aoki Publishing Co., Tokyo.
Overseas membership dues : ¥11,400 per year.
(国内) A会費 10700円　B会費 8800円

編集者　歴史学研究会／〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-2 誠華ビル／TEL.03-3261-4985／代表者 木畑洋一／振替口座 00120-1-177282
発行所　㈱青木書店／〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-60／TEL.03-3219-2341／発行者 青木理人／振替口座 00180-5-36582
http://wwwsoc.nii.ac.jp/rekiken/　印刷：奥村印刷／製本：梶田製本
© Rekishigaku kenkyukai, 2006 : Printed in Japan

雑誌 09605-03
4910096050369
00686
定価 720円　本体 686円

L 史学共通

2006年3月15日発行(毎月1回15日発行)：1954年3月8日第三種郵便物認可

歴史学研究

2006.3

歴史学研究会 編集

18. 2. 27

論　文
日本中世の利息制限法と借書の時効法 ……井原今朝男 (1)
西村茂樹『日本道徳論』の形成過程 ……真辺将之 (18)
研究動向
中近世移行期日本の貨幣流通史研究を振り返って ……川戸貴史 (36)
書　評
牧原成征『近世の土地制度と在地社会』 ……稲葉継陽 (44)
青井哲人『植民地神社と帝国日本』 ……青野正明 (47)
小池聖一『満州事変と対中国政策』 ……小林啓治 (50)
シンジルト『民族の語りの文法』 ……渡邊日日 (53)
若尾祐司・羽賀祥二編『記録と記憶の比較文化史』 ……小関隆 (57)
史料・文献紹介 …… (60)

No.812　青木書店

歴史学科